虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です

虹の架橋

第３４５号
令和６年５月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
中鉢和明さん
（みどり市大間々町）

芝居小屋愛に溢れる「ながめ余興場」の施設長さん。誠実で和やか人柄は、長年ご縁をいただいていた中鉢さんのご両親を思い出させてくれます。

ながめ余興場まつり

ながめ余興場は昭和十二年に造られた木造二階建ての芝居小屋で、場内には花道、桟敷席、回り舞台があり、昭和レトロの雰囲気を醸し出しています。現存する芝居小屋は全国でも十数か所しか残っておらず、みどり市の貴重な財産として利活用されています。

「ながめ黒子の会」は、ながめ余興場の応援団として平成５年に誕生し、平成１８年にＮＰＯ法人となり、歌舞伎や落語、浪曲や歌謡イベントなど、ながめ余興場を利用したいという人たちを応援する縁の下の力持ち（黒子）として活動を続けています。

６月９日(日)は「ながめ余興場まつり」を開催。**チケットは、小屋設計、足利屋、穂紫野、井筒屋支店、シイナ、アスク**ながめ黒子の会では只今賛助会員を募集中！年会費１０００円でながめ余興場のイベントのご案内や定例寄席の５００円割引特典もあります。

ながめ余興場まつり
日　時　6月9日（日）
　　13：30開場　14：00開演
木戸銭　前売1,500円　当日2,000円
会　場　ながめ余興場
出　演　玉川奈々福・玉川奈みほ
　　アンカンミンカン・ガッツいわせ
　　チョッキGT5000　El Cielo　ほか

小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）《345》

ＯＫバジ・ネパール支援三十年

ＯＫバジこと垣見一雅さんは今から３０年前の１９９３年に単身でネパールの寒村・パルパ郡ドリマラ村に移住、村人たちが建ててくれた６畳一間の小屋を拠点に日本からの善意を暮らしに困っている村人たちに届けるパイプ役になりました。ＯＫバジとは「願いを聞いてくれるおじいさん」という意味。東京で英語教師という安定した仕事を辞してネパールに移住した垣見さんに対し、最初に支援団体を立ち上げ、物心両面で応援したのが桐生の富澤繁司さんとその仲間達でした。今、ＯＫバジを支援している団体・個人は国内だけでも２００以上になっています。

今年の３月、桐生のＯＫバジを支援する会（ＯＫＳＳ・富澤均会長）の一行がネパールを訪問し、ＯＫバジの案内で３０年間に作られた学校や医療施設などを見学し、生徒や村人達から熱烈な歓迎を受け、交流を深めてきました。

２０１５年のネパール地震の際には、「ＮＰＯ法人日本を美しくする会」から復興のための資金として３５０万円がＯＫバジに託されました。日本を美しくする会は、掃除を通して世の中の荒みをなくす活動を地道に続けている団体で、ＯＫバジの活動を応援する支援者もいて以前から交流がありました。ＯＫバジは預かった支援金をマダナアスリット校というベーシックスクールの６つの教室の復興に活用しました。その教室の壁には「NIPPON-O-UTSUKUSHIKU-SURU-KAI」というプレートが掲げられていました。

桐生のＯＫＳＳからＯＫバジに託された支援金は３０年の間に６５００万円を超えました。ＯＫバジはこの善意を村人達と相談しながら無駄なく活用しています。そしてその活用した報告を、覚えたてのパソコンで毎月、写真付きのメールで送信してくれています。

６月２日(日)午後２時から、桐生市市民文化会館国際会議室でＯＫバジ講演会を開催いたします。ぜひご来場ください。

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の絵《345》
平田哲也さん『救い』

福岡県みやま市の平田哲也さんは、「癒しのてっちゃん地蔵」の作者で、やさしい言葉が添えられたカレンダーを毎年いただいています。カレンダーにはメモ書きできる欄があり、日々の出来事を記した過去五年間分のカレンダーを寝室の壁に飾り、去年の今日は？一昨年の今日は？と自分を振り返る機会になっています。

「自分自身を知るのは、楽しんでいる時か、悩んでいる時のどちらかだ。悩みと喜びを通してのみ、自分が何を求め、何を避けなければならぬかを教えられる」というドイツの詩人ゲーテの言葉もてっちゃんから教わりました。

靖ちゃん日記

令和六年四月十七日（水）

渥美清の「男はつらいよ」を第一作から第五十作の「お帰り寅さん」までネットで全部観終った。第一作の寅さんは55年前だった。今、観直してみると、昭和の時代がいかにいい時代だったかを改めて感じた。今なら「セクハラ」、「パワハラ」、「不適切にもほどがある」と言われそうな言葉や行動が飛び交っているが、その言動の中に親しみや温かみがあり、笑って許せる大らかな時代でもあった。

寅さんは失恋するたびに旅先から「拝啓、思い起こせば恥ずかしきことの数々、今はただ後悔と反省の日々を過ごしております」と絵葉書を書いていた。二十五年間、寅さんを演じた渥美清さんは、実生活でも旅先から毎日、お母さんに「俺、元気」と葉書を書いていたという。

そんな優しくてシャイな渥美清さんとコンビを組んで失恋ネタの漫才をやってみたかった。コンビ名は「やすし、きよし」

桜舞う この世とあの世を繋ぐ空

私の隣組には明治から平成まで書き続けられてきた「不幸記録帳」という和綴じの書類があり、そこには「昭和二十七年四月五日午後六時、男子を出産したるも産後経過思はしからず清見医師、奥寺医師両氏の応急手当をほどこしたるも遂に快癒に至らず薬石効なく午後九時永眠せらる。仍て四月八日、花まつりの本日、桜花開かんとする陽春に告別式を挙行せり。俗名松﨑ちよ」と記されています。

桜が舞う季節になると私を産んでくれた母のことを偲び、隣近所の人たちに助けられて今の自分がいることに感謝しています。

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百四十六号は令和六年六月一日(土)発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん